

私は即座に首を振った。マジックの腕前と人柄の信用性は別問題だ。

「うーん、手強いなあ。どうしたら信用してもらえらるんだろう」

「あの、私そろそろ帰ってもいいですか」

「いやいや！ ちょっと待ってよ。ハトでも信用してもらえないなら他の動物を出そう。そうだ、ライオンはどうか？ ライオンを出したらさすがに信用してくれるよね？」

「け、結構です」

「じゃあワニがいい？ いや、キリンにしようか！ それとも象……」

「もっと結構ですっっ」

力いっぱい叫んでから、私は競歩なみのスピードで歩き出した。公園の出口なんてわからないけど、とにかく逃げる。この怪しさ満点の奇術師から、今はいち早く逃げるのみだ。

「おーい、お嬢さーん」

「っ、ついて来ないでください！」

「待ってよー。女の子の夜道の1人歩きは危ないよー？」

（あんたが一番危ないんだってば……！）

私はなりふりかまわず、走り出した。

——それから、どれくらい走り続けたのか。気づいたら公園を抜け、大きな通りに出ていた。

あの妙な奇術師の姿はどこにもない。どうにか逃げることができたようだった。そこで私は、ふと立ち止まる。

(あれ……？ 日比谷って、たしかオフィス街だよね……？)

目に映ったのは、舗装されていない道路、レンガ造りの建物。殺風景な下町といった風景だ。どことなく異国情緒が漂っているのは、洋風な建物が多いせいかもしれない。

(ここ、本当にどこなんだろ？)

日比谷公園の付近なら、たぶん有楽町ゆうらくちょうや霞かすみが関あたりだと思っけど、高層ビルなど一つも見当たらない。

(……ん？)

今、動物の鳴き声が聞こえたような気がして私は顔を上げた。たとえるなら、馬のいななきにも似た鳴き声。さらに遠くのほうから、ひづめが地面を駆けるような音まで聞こえてきた。

(……気のせいだよね)

『日比谷』と『馬』というキーワードがどうしても結びつかず、私はかぶりを振る。

(なんだろ、この感覚……)

違和感の正体が喉まで出かかっている。でも、うまく言葉では表現できない。もやもやする気持ちをどうにか抑え込み、暗い夜道をしばらく歩いていると、どこからか魚の焼ける匂いが漂ってきた。

(いい匂い……。近くに定食屋さんとか、居酒屋でもあるのかな)

夜の有楽町や銀座というところ、会社帰りのお父さんたちがお酒を酌み交わしているイメージだ。ぴかぴかのネオンが光るチェーン店の居酒屋。大きなカラオケボックスのビル。ずらりと続くタクシーの行列。でも、この近辺にそんな俗っぽいものはない。どこか懐かしいようなレトロな建物がただひたすらに並んでいるだけだ。

(とりあえず、誰かに駅までの道を聞いてみよう)

「すみませーん」

私が声をかけたのは、羽織り袴に丸眼鏡をかけた男の人だった。なんだか昔のモノクロ写真から抜け出してきたような格好だ。

「あの、この近くに駅はありますか？」

「駅……かね？」

彼は下げていた提灯を掲げ、物珍しそうな目で私の頭からつま先までをゆっくりと眺めている。

(な、なんだろ……。人のことじろじろ見て)

やがて彼は、橋のかかるお堀を指さした。

「新橋ステーションなら、このお堀沿いに歩いていけば着くけれどね」

(新橋ステーションって……新橋駅のことでもいいのかな)

近くに大きな駅があるようで、私はほっと胸を撫で下ろした。

「……いや、しかしあんた」

「はい？」

「ずいぶんと破廉恥はれんちな洋装だねえ。……やれやれ、これだから最近の若いモンは」

(は、はれんち???)

私は慌てて自分の格好を見た。学校指定の制服に定番の黒のタイツ。かなりフツ一の格好だと思う。なのに彼は、しかめっ面で私を一瞥してから、さっさとその場を去ってしまった。

「はれんち……」

さっきの一件で地味にショックを受けながら、私はお堀沿いの大通りを歩いていた。相変わらず、夜道は暗い。すれ違う人影もまばらで、とてもこの先に駅があるとは思えないほど活気がなかった。(……でもなんで、みんな着物を着てるんだろ)

たまにスーツ姿の男性もいるけど、女の方は100パーセント着物姿だ。おかげで制服姿の私は、ずいぶんと浮いてしまっている。

(なんか、変……)

まるでテーマパークに迷い込んでしまったようだった。長崎のハウステンボスとか日光江戸村とか、ああいう特殊な空間にいる時と同じ空気。なんだか、身体の半分だけ非現実に入り込んでしまったような——。

——と、その時。遠くから、地を揺らしながらなにかが駆けてくる音が聞こえた。

(なにあれ?)

チリンチリンと、せわしない鈴の音。黒くて大きな物体が、猛スピードで大通りの真ん中を突っ走ってくる。それが2頭の馬だと気づいた瞬間、私の身体は凍りついたように動かなくなった。

(馬? ……なんで馬!?)

ここは東京のど真ん中だ。なのに2頭の馬はひづめで地面を打ち鳴らし、たてがみを風になびかせながら、一直線に私のほうへと迫ってくる。あまりに突然の出来事に、靴の裏が地面に貼りついてしまったかのように動けない。早く、逃げなきゃ。逃げなきゃひかれてしまう。早く——!

「きゃあっ!」

死を覚悟した瞬間、ぐい、と背後から誰かに荒々しく抱きかかえられた。私の身体がふわりと浮いたのと、2頭の馬が疾風のように私のすぐ脇を通りすぎて行ったのは、ほぼ同時だった。

「おやおや、ぼんやりしてたら危ないよ。お嬢さん」

「っ!？」

耳元で悪戯っぽく囁く声がして、私は息を呑む。背後から私を抱きかかえていたのは、さっきの怪しい奇術師だったからだ。

「な……なんであなたが……っ」

とっさに彼からぱつと離れ、震える声で問う。

「やあ、偶然だね。また会えて嬉しいなあ。あれ？ おかしいな、どうして僕はストーカーを見るような不信感たっぷりのまなざしを向けられているんだろう」

「いや、だってそのまんま……」

「僕がいなかったら、君はもう少しで馬車鉄道にひかれてしまうところだったんだけどなあ。つまり僕は、君にとって命の恩人ってこと」

(命の恩人?)

たしかに、それはそうだ。馬にひかれそうになったところを助けてくれたのは、ほかでもないこの人。この男がどんな危険人物であれ、助けてもらった事実には変わりはない。

「た、助けてくれてありがとう」

とりあえず、お礼を言った。すぐ逃げられるよう、露骨に身構えながら。

「あの……今の馬、なんなんでしょう。……まさか！ あなたがマジックで出したんじゃないでしょ

うね。さつきハトとか出してたし！」

「ううん、だから馬車鉄道だよ。この時代の路面鉄道は馬が動力なんだ。日本では電車が実用化されていないからね」

(は???)

「どう説明したらいいんだろう。つまり今の君は、電車の通っていない時代に存在しているってことになるんだけど」

「???:??」

「まあ早い話、ここは明治時代の『東京』^{とうきょう}なんだ。君は僕のマジックによって、平成から明治へタイムスリップしてしまったというわけさ」

(——明治?)

ぼんやりとした頭で考える。明治と言われて真っ先に思ったのは、ここが明治時代を再現したテーマパークだということ。この街並みすべてがテーマパークの一部だしたら、たしかにいろんなことが納得できた。

(でも、いつのまに新橋にそんなのができたんだろ)

あまり土地勘のない場所だけに、こんな大がかりな施設が作られていたことにいまさらながら驚く。ひとまず状況を理解した私は、軽く頷いた。

「なるほど、よくわかりました。じゃあ私、帰ります」

「あーっ、ちよっと待った！」

「は、放してくださいっ」

大きな手が、私の腕をがしつと掴む。じたばたと手足を動かしても、彼は私をぎゅつと拘束したまま
まちつとも解放してくれない。

「君、やっぱり状況がよくわかってないだろう」

「わかってるってば！」

「じゃあ聞くけど、君はいったいどこに帰るつもりだったのかな？」

「だから……っ」

家、だ。帰るといえば家に決まっている。お父さんとお母さんが、家族が待っている場所――。

（――あれ？）

私はこめかみを押さえ、うつむいた。帰らなきゃと思いつつも、自分の家がどこにあるのかまっ
たく思い出せなかったからだ。

（どうしよう……）

私はいったい、どこに帰ればいいんだろう。なんでこんなところに迷い込んでしまったんだろう。く
らくらと眩暈めまいがした。気づいたら私の身体は、得体のしれない恐怖で小刻みに震えていた。

「まあまあ、お嬢さん、落ち着いて。君が混乱するのも無理はないよ。時代を超えるっていうのは、
なかなかの大仕事だからね。慣れてないとすぐには頭が順応しないんだ。少し時間が経てば混乱も収
まるはずだから、それまで安心してかまえていればいい。ね？」

（いや、ぜんぜん安心できないし）

傍はたから見たら、私は生まれたての子鹿のようにぶるぶると震えていたに違いない。

そんな私を励ますつもりなのか、怪しい奇術師はしきりに『無問題』とか『ドントウオーリー』な

どと声をかけてくる。

(だから安心できないってば)

でも、そんな親身な態度に接していくうちに、命の恩人だということもあってほんの少しだけ警戒心が解けた。もちろん、全面的に信用する気にはなれないけど。

(焦ってもしかたないよね。とにかく落ち着かなくちゃ)

まずは状況を1つずつ整理していかなければ。

「ここって……新橋なんですよね？」

と尋ねると、奇術師はまた例によってどこからともなく地図を取り出した。

「うーん、厳密に言うとおおわりちよう銀座の尾張町だね」

「銀座、ですか？」

「ああ、現代だと尾張町っていう住所は残ってないんだけどね。たぶん銀座4丁目の交差点あたり。

日本で一番地価の高いところだ」

私の記憶にある華やかな銀座とは、なにかもが違い過ぎる。いつのまに街ぐるみで、明治時代風にリニューアルしたんだろう。提灯を掲げた人力車が何台も通り過ぎていく。レンガ作りの建物が立ち並ぶ街並みは美しい。

「すごい、本物みたい」

「うん、本物だよ？」

(ん?)

私と奇術師は、そのまま3秒ほど見つめ合った。

「ここはちょうど銀座レンガ街と呼ばれていた大通りさ。いやあ、ハイカラな街並みだねえ」
「はあ……」

「日本人が見よう見真似で西洋の建築をまねたものだから、どこか和風な趣おもむきもある。それもまた風情があつていいじゃあないか」

奇術師は身振り手振りを交え、観光ガイドのようなトークを繰り出してくる。

「あの、あなたのお名前は？」

私はなに気なくたずねた。一応、命の恩人であるわけだし、名前ぐらいは知っておきたい。

「え？」

「あなたの名前、聞いてるんだけど」

「ああ、名前ね。名前……」

しばしの間があつた。

「僕の名前は、チャーリーだ」

「……チャーリー？」

(なにその、とってつけたような名前)

思いきり偽名っぽいというか、偽名以外のなにものでもないような気がした。ますます怪しい。

(怪しい……)

「君のその、猜疑心さいぎしんに満ちた鋭いまなざし……たまらないな」

「はい？」

「いや、なんでもない」

彼はすぐに居住まいを正した。

「ところでお嬢さん、君の名前も聞かせてくれないかな？」

（私の名前？）

「私の名前は……綾月芽衣あやづきめい」

考えるまでもなく、名前がパツと出てきたことに安堵あんどする。自分の家だけでなく名前まで忘れてしまったらそれこそ本物の記憶喪失だ。

「ふうん、いい名前だ。綾月芽衣ちゃんか」

「はあ。どうも」

（呑気のんきに自己紹介してる場合でもないんだけどな……）

でも正直、この状況をどうしたらいいのか、私もよくわからない。わからないけど、少なくとも今、ひとりぼっちじゃなくてよかったと思う。この意味不明な状況で1人だったら、もっと取り乱していたと思うから。

「っ！」

その時、ぐるぐるるとお腹の虫が盛大に鳴き始めた。緊張が解けたせいかな、急激に身体が空腹を訴えてくる。

「あれ、もしかしてお腹が空いてるのかな？」

「は、はい。ちよつとだけ」

（うわー、恥ずかしい）

ごまかしようがないくらい大きな音だった。ついつい顔が真っ赤になる。

「うーん、そうだよねえ。僕もできればこう、小腹なんかを満たしたいところだけど……残念ながらお金がない」

「え？」

(お金持ってないの？ いいおとななの？)

もしかすると、奇術師という職業はあまり儲もうからないのかもしれない。……などと、余計な心配をしてみたり。

「じゃ、じゃあ、さつきマジックでハトを出したみたいにも、ぱぱっとハンバーガーかサンドイッチなんかを」

「ハトもライオンもワニも出せるけど、ハンバーガーやサンドイッチは出せないだよねえ、残念ながら」

「出せないんだ……」

(なんて不便なマジック……)

ハトやワニのような動物が出るより、食べ物が出るほうが家計も助かるし、便利なのに。

「あ！ いいことを考えた！」

彼は突然大きな声を出し、ぽんと手を叩く。

「うまくいけば、僕たちは豪華な夕食をタダ食い……じゃなくて、ごちそうしてもらえるかもしれない！」

「ほんとに？」

チャーリーさんの顔が、ぱあっと輝いた。

(この近くに、友達でも住んでるのかな?)

突然、家に押しかけて夕食でもおごってもらおうつもりなのかもしれない。

「問題は、うまく潜り込めるかだけど……」

「?」

「ああいや、こっちの話。じゃあ、さっそく行ってみようか！」

「はい、到着」

「……って、えっ?」

歩くこと約十数分後。案内されたその建物を見て、私は本気で腰を抜かしそうになった。

闇夜の中にぼんやりと発光する、ひととき大きな2階建ての白亜の館。宮殿と呼びたくなるような見事な洋館だった。半円を描くアーチ窓から零れるあかりが、夢のようにきらきらと輝いている。正面玄関へと続く小径こみちには大きな庭園灯が置かれ、着飾った人々を乗せた馬車や人力車が次から次へと正門をくぐっていく。

(きれい……)

絵本からそのまま抜け出てきたような幻想的なたたずまいに、私はしばし言葉を失っていた。

「ははっ、どうしたの? ハトがマシンガン喰らったような顔してるけど」

館に目を奪われている私に、チャーリーさんが声をかけてくる。

「うん、あの……」

(チャーリーさんのお友達って、石油王とかそういう人?)

こんな館を所持できるなんて、そういうレベルのお金持ちなのではないかと思う。

「す、すごいお屋敷だなあって思って。誰が住んでるの？」

「誰も住んじやいないよ。ここは明治政府が威信を懸けて建てた、いわゆるパーティー会場だ」

「パーティー会場？」

「そう。君も知ってるはずだよ。教科書にも載ってるぐらい有名だからね」

そう笑ってから、彼は恭しい動作で私に一礼をした。

「鹿鳴館ろくめいかんへようこそ。お嬢さん」

「鹿鳴館……」

鹿鳴館といえ、彼の言うとおりの教科書にも載っている明治時代の歴史的建築物だ。政府のお偉方が夜な夜な集まり、外国の要人を接待する場所……だった気がする。

「これって、本物の鹿鳴館なの？」

「もちろん本物だよ」

（鹿鳴館って、今の時代にもちゃんと残ってたんだ。でも、あんまり古くない……よね）

大昔に取り壊されたと思い込んでいたけど、老朽化の気配はなく、庭園灯に照らされる外壁はペンキ塗りたてのように真っ白だ。こまめに改修工事が行われているせいなのか、見事な建物だとは思いますが、あまり歴史的な重みは感じられなかった。

「というわけで、さっそく侵入してみようか」

「は？」

私は驚いてチャーリーさんの顔を見上げた。その顔には、邪気のない笑みが浮かんでいる。